

- 十一月、二二六頁。
- (10) 村野四郎『現代詩読本』河出書房、昭和二九年二月、一八二頁。  
「層雲」(第一二巻第五号) 大正二一年八月、四九頁から引用しておく。
- (11) 追憶  
ほのじろく  
うそ寒い夕闇に  
ひるがへつてゐた  
一枚の木の葉であつたが、  
あゝ、それは  
私の遠い遠い  
追憶のひとつらであつた。
- (12) 「年譜」六五〇頁。
- (13) 前掲書『現代詩読本』一八三頁〜一八四頁。
- (14) 「風流陣記」の引用は、「風流陣」(第一冊) 昭和一〇年一〇月、一五頁。  
「風流陣」については、和田桂子編『コレクション・都市モダニズム詩誌  
第21巻 俳句・ハイクと詩I』(ゆまに書房、平成二四年一〇月)、青木  
亮人編『コレクション・都市モダニズム詩誌 第22巻 俳句・ハイクと  
詩II』(ゆまに書房、平成二四年一〇月) 所収の復刻版及び「解題」を参  
照。西村将洋「神奈川近代文学館蔵 俳句雑誌『風流陣』総目次―  
[HAIKAI DU JAPON]の軌跡―」(『同志社国文学』第五九号、平成一五  
年一二月)にも詳しい「解題」がある。なお、同論五〇頁の昭和一二年  
一二月の「風流陣」(第二四冊)の目次に、「村野四郎「秋日」(一二二頁)」  
とあるが、正しくは「村野三郎「秋日」(一二二頁)」である。
- (15) 「年譜」六五九頁。なお、筆者の調査では、昭和一一(一九三六)年には、  
「芸芸汎論」(第六巻第三号) 三月に詩「慄える世界」、「若草」(第一二巻  
第六号) 六月に詩「蜀葵」「チキタリス」、「芸芸汎論」(第六巻第一〇号)  
一〇月に詩「田園歌」が発表されている。
- (16) 「年譜」六四九頁。
- (17) 前掲書『現代詩読本』一八三頁。
- (18) 同号掲載の「森の霧の」の句は、村野四郎で掲載。
- (19) 同号掲載の「泣かうと」の句は、村野四郎で掲載。
- (20) 同号掲載の「風邪の子を」の句は、村野四郎で掲載。
- (21) 同号掲載の「朝のポストに」の句は、村野四郎で掲載。
- (22) 同号の前掲五句とは別に「句会作品抄」として掲載された作品である。
- (23) 「庭松の」以下三句は、同号の掲載三句とは別に「風流陣句会 師走抄」  
として掲載された作品である。
- 引用文等については、原則として旧字体は新字体に改め、仮名遣いは原文  
どおりとした。ルビは一部省略したところがある。

## 六、終わりに

本稿によって新たに村野四郎の俳人としての一面を明らかにすることができた。『畏』から『体操詩集』を経て戦時下に至るまでの過程を明らかにし、転換点となった『体操詩集』を再評価するために、これらの俳句は文学資料としての重要な意味を持っていると考えられる。さらに未収集の俳句について今後補遺に努めたい。また、今回は、個々の俳句についての分析にまでは至らなかったが、今後、同時代の詩作品と並行して分析することにより、詩的方法獲得の過程について再検証していきたい。

なお、戦時下、「風流陣」で共に活動した詩人達についても注目される。『体操詩集』の刊行に深く関わった北園克衛も、新即物主義の同胞であった笹沢美明も、俳句と詩を並行して創作していた。詩人の創作過程における詩と俳句の関係は、重要な研究の視点であると考えられる。今後さらに調査をすすめ、当時の歴史的動向をふまえつつ、新たな視座から『体操詩集』を検証することとしたい。

## 【付記】

本研究はJSPS科研費JP20K00332の助成を受けたものである。

## 注

- (1) 『定本村野四郎全詩集』（筑摩書房、昭和五年八月、六四六頁〜七一〇頁）所収の大野純編「村野四郎年譜」には、大正期の項に次の八句が紹介されている。大正八年の三句は「文章倶楽部」の内藤鳴雪選の俳句欄に投稿して「選外佳作になった」とあるが、筆者は確認できていない。引用にあたり仮名遣いは「年譜」記載のとおりとした。

足袋をつぐばあさん日なたぼっこかな（大正二年）

秋晴れの屋根に立ちたる男かな（大正八年）

穢多町にいたる小径や赤蜻蛉（大正八年）

病人夢の話をする朝の白い蒲団（大正九年）

兄弟が寝ついた夜の噴水（大正九年）

眠り草実となる日なたがある（大正一二年）

枯木が曲った家を憶えている（大正一二年）

冬木がくねった家を憶えてゐる（大正一四年）

(2) 「年譜」六四七頁。

(3) 「年譜」六四八頁。

(4) 当時は本名「村野四郎」、筆名「村野哀醒」「村野哀醒子」で投稿していた。同じ号に異なる名前前で投稿していたこともあった。本稿第五章「資料編」の備考及び注(18)(19)(21)を参照。「中央文学」（第五卷第一号）には「投稿家諸氏に」において「短歌俳句などで、一人三首の規定を守らない許りか亥し名前を変へて二人分三人分にして出す人があります。そう云ふ事は慎んで下さい。当方でも注意します。」（一七頁）との注意書きがある。

(5) 荻原井泉水「選後に」（『中央文学』（第五卷第四号）大正一〇年四月、一

九〇頁。荻原井泉水「選後に」（『中央文学』（第五卷第六号）大正一〇年

六月、一三頁。

(6) 荻原井泉水「選後に」（『中央文学』（第五卷第九号）大正一〇年九月、一

四頁。

(7) 荻原井泉水『新しき俳句の作り方』（日本評論社、大正一〇年八月、一二五頁〜一二七頁）の「型より入る勿れ」の章に拠る。

(8) 上村直己「初期『層雲』とドイツ文学」（『熊本大学教養部紀要 外国語・

外国文学編』第一五号、一九八〇年、六五頁〜七六頁）に詳しい。

(9) 唐沢柳三「層雲」（『日本近代文学大事典 第五卷』講談社、昭和五二年



一九三六年	五月	六月	七月	八月	一〇月	十一月
<p>古き家の灯のもとかなし野びろ味噌 本の上にいねたる子ろや遠蛙 古里は花なき樹々の茂りたる あざけりを身近くきけば行々子 砂を匍ふ野茨さきてほの暑き 足よわを嘆ける妻や茨のはな ハンカチに野苺つつむ妻なりし 昼くれば虎杖草の葉も熱くして くるしく笑ひ虎杖草など折りぬ 水ぎわの花いろすき薄暑かな 憂き日々やしげりてふかき首楯 はかなごとおもへば鳴りぬ蚊帳の鏝 雑魚箆にまじれる蟹の明けやすき 朝すずし洞みてくるき花あふひ 梢になく蛙も多磨のかたほとり 咲きのぼる蜀葵の日日を倦みにけり 稲妻に紫陽花みえし庭のすみ 夏おそきみそはぎの茎あかくして ものうげにコスモス避けてひと行きぬ 顔あつく酔ふてもどるや菊の花 蝨斯におびえし様子も暮れはてぬ 傾きて鶏頭ありし脊戸の水 木犀や生活にしげきうれひごと ゆく秋や雨にぬれたる茸とり 紫苑たかし冬づくころの夕けむり</p>	<p>〔風流陣〕(第七冊) 五月 〔風流陣〕(第七冊) 五月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第八冊) 六月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第九冊) 七月 〔風流陣〕(第一〇冊) 八月 〔風流陣〕(第一〇冊) 八月 〔風流陣〕(第一二冊) 一〇月 〔風流陣〕(第一二冊) 一〇月 〔風流陣〕(第一二冊) 一〇月 〔風流陣〕(第一二冊) 一〇月 〔風流陣〕(第一二冊) 一〇月 〔風流陣〕(第一三冊) 十一月 〔風流陣〕(第一三冊) 十一月 〔風流陣〕(第一三冊) 十一月</p>	<p>《樹の花》(古里多磨にて) 《樹の花》 《茨の花》(古里多磨にて) 《茨の花》 《茨の花》 《茨の花》 《茨の花》 《茨の花》 《茨の花》 《茨の花》 《花あふひ》 《花あふひ》 《花あふひ》 《花あふひ》 《花あふひ》 《花あふひ》 《二句》 《二句》 《二句》 《秋日》 《秋日》 《秋日》 《秋日》 《秋日》(武蔵野をあるく) 《冬日》 《冬日》 《冬日》 《冬日》(鹽原にて)</p>				







一九三三年 八月

一月

悩み日に日に煙る暑さ松の花さけり  
父の法会にまいり苦い露の臺食はさるる  
霞切に鳴きせかるる古里の細橋わたる  
窓あけて飯をはみえる女の貧しい夕景  
山の仏迎へる夜道にせまりて荒い木の葉  
仏のせたる火をかざし走り狂へり  
雨の蜩にしつぼりと客が濡れて来て暮れ  
子供裸にて油買ひに来る夕べの木槿

かしこい顔して子が蝉鳴かせ持てくる  
きりぎりす青う鳴かせて細々と病人が啜るもの  
古びた提灯で母が土蔵から出てくる月夜

花鉢の如くしづかに心をおかうよ  
遅しい鶏が道に出て夕日が淋しい山里

或時は虫籠みる程の心の安けさもちて  
おばばの黒い眼鏡なつかしい夕べの蜩

君と来てうれしい山蔭の青い栗のつぶら実(岡君を訪ふ)

なやましき夏にゐて瓜もみ涼う作りてたうべ  
焼酎瓶土間においてこの秋深い山家(名栗にて三句)

雨のにはとりの遊ぶ見て山家の廁にゐる  
秋風の家に来る子はちすの花真白に持ちて

唐蜀黍はむ子の歯の美しく夕月見てゐる  
小さい夕日が落ちて行く人參の種まいてゐる

瓢おどけて下る軒先の朝の飯くふ親子  
廁の窓から見える茗荷畑の雨音青い

深き葉蔭の夏病みのさみしい子を遊ばせる

一二月

〔層雲〕(第一三卷第五号) 八月  
《桜の実》

〔層雲〕(第一三卷第五号) 八月  
《桜の実》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第七号) 一月  
《花鉢》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》

〔層雲〕(第一三卷第八号) 一二月  
《いなかの秋》









一九三三年	一月	三月	五月	七月	八月	九月	一〇月
枯草のここ耕やされ黒土の淋しい冬菜	すつかり冬らしい家の窓あけて人が見てをる	一日安けかりし夕日に竹がゆれてゐる	酔ひしれて人が行く切なきまでの月光	夕暮の人混みに行きし子犬の鈴の音かな	若人ら淋しう唄ひ上ぐる空の枯木	蛙の闇のここ明るいまどひの灯ともりをる	巢をくむ鳥が鳴くよ今朝も家出づる
船と船静かに寄り行きて暮れにけり	重荷ひく人の影くつきりと夏が来し大地	道草の色冷たし赤児の車おして行くかな	熟れ麦の雨明るしびつしよりと濡れて家ある	電柱の瀬戸物したしや古里の雨が晴るる	草の葉草の葉に夕日がすいて淋しい旅人	病人あよむ地に立ちて鳳仙花の遅しい青茎	淋しい夜風となりししるじろと蒲団のべけり
夕暮の郵便夫疲れて道のべの栗の花たるる	朝空の栗の花静かに牛乳をすする病人	わづかばかりの葵に水打ちて暮るる安けさ	妹いけて呉れし真赤な栢榴の花に本よむ	百姓眼を上ぐる桃の実の真青に野が晴るる	青青と吹かれて人ときりぎりす淋しい昼原	言葉明るく別るる淋しさを鯛になかれけり	油に描かるる田舎の空の雲もない空色
よき人送りし夏おそき畑の青空							
〔層雲〕（第一二卷第一〇号）一月	〔層雲〕（第一二卷第一二号）三月	〔層雲〕（第一二卷第一二号）三月	〔層雲〕（第一二卷第一二号）三月	〔層雲〕（第一二卷第二号）五月	〔層雲〕（第一二卷第二号）五月	〔層雲〕（第一二卷第四号）七月	〔層雲〕（第一二卷第四号）七月
〔層雲〕（第一二卷第四号）七月	〔層雲〕（第一二卷第四号）七月	〔層雲〕（第一二卷第五号）八月	〔層雲〕（第一二卷第五号）八月	〔層雲〕（第一二卷第五号）八月	〔層雲〕（第一二卷第五号）八月	〔層雲〕（第一二卷第五号）八月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月
〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第六号）九月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月
〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月	〔層雲〕（第一二卷第七号）一〇月
村野哀醒子							



## 五、資料編

## 凡例

- 一、発表年月、作品本文、所収雑誌の順に記載し、年譜形式にて配列した。発表年月は、西暦で記載した。
- 二、作品は、一九一九（大正八）年から一九四二（昭和一七）年までの戦前の俳句のみをあげた。
- 三、所収雑誌については、雑誌名、巻号等、発行月の順に記し、巻号等は雑誌の表記に即した。
- 四、備考欄には、投稿の筆名、入選に関する事項、句題等の作品に関する重要事項を注記した。筆名「村野哀醒」「村野哀醒子」を記入していない作品は本名村野四郎での掲載である。入選については、一等、二等、秀逸等の上位のみ\*を付して記載、句題は《》で記載した。なお前書は原則として《》で記載した。(18)《23》は注番号である。

## 参考文献

- ・大野純編「村野四郎年譜」(『定本村野四郎全詩集』筑摩書房、昭和五五年八月)
- ・西村将洋「神奈川近代文学館蔵 俳句雑誌『風流陣』総目次―「HAKKAI DU JAPON」の軌跡―」(『同志社国文学』第五九号、平成一五年一二月)
- ・和田桂子編『コレクシヨン・都市モダニズム詩誌 第21巻 俳句・ハイクと詩Ⅰ』(ゆまに書房、平成二四年一〇月)
- ・青木亮人編『コレクシヨン・都市モダニズム詩誌 第22巻 俳句・ハイクと詩Ⅱ』(ゆまに書房、平成二四年一〇月)

発表年月	作品本文	所収雑誌	備考
一九一九年 九月 一〇月	蚊柱や馬に餌をやる宵月夜 夕月に低き家竝や群れとんぼ 雑草に唐辛子赤く雨晴る、 童べ風にゆる、若苗持ちをり	「文章倶楽部」(第四卷第九号) 九月 「文章倶楽部」(第四卷第一〇号) 一〇月 「文章倶楽部」(第四卷第一一号) 十一月 「中央文学」(第四卷第九号) 九月 「中央文学」(第四卷第一〇号) 一〇月	村野哀醒 村野哀醒 村野哀醒 *秀逸
一九二〇年 九月 一〇月	父の棺送れば蜀黍道にせまり		

には、「この年は、『詩法』につづく新しく計画中の詩誌『新領土』の準備などで作品を発表していない」とあるが、実際には、「風流陣」への俳句のほか、「若草」「文芸汎論」に数篇の詩やエッセイが発表されている。<sup>15)</sup>

「風流陣」に発表されているのは俳句と数篇のエッセイで、俳句は昭和一〇（一九三五）年一月から昭和一七（一九四二）年一月までに、計五九句がある。「層雲」を去って九年の年月が経過しており、『体操詩集』及び第三詩集『抒情飛行』（高田書院、昭和一七年二月）所収の一部の詩篇を創作していた時期とも重なっている。再び俳句を作り始めた経緯は現在のところ分かっていないが、「風流陣」でも活動していた北園克衛や笹沢美明らの影響があったと推察される。

年代が前後するが「年譜」の大正二二（一九二三）年の項に次のような記述がある。<sup>16)</sup>

慶大入学後も、層雲句会に列席し、新傾向俳句を書きつづけてきたが、「眠り草実となる日なたがある」「枯木が曲った家を憶えている」などの句を作るにいたり、自由律句の世界にも類型があり、また息ぐるしい因習的な形式のあることを知り、そのトリヴィアリズムに自ら苦しくなると、更に自由な形式を求めるようになった。

この記述も前掲の回想「一人の詩人が歩いた道」に拠ったもので、村野四郎は萩原井泉水に心酔していた当時を回想して次のように述べている。<sup>17)</sup>

（前略）井泉水の暗示は、永く私の心に文学の深さと、不思議さに対する魅力の鍵となって残ったのでした。

くりやの音かたことと明けて鯛

眠り草が実となる日向がある

というような句を際限もなく作りました。そしてついに

枯木が曲った家を憶えている

というような句を作るようになって、しだいに私の詩精神とこの短詩形式との間に交わされなければならぬ激しい摩擦と、格闘とを自ら感じるようになりました。

「くりやの音」「眠り草が」「枯木が」の三句について、現段階では雑誌掲載を確認できていない。村野四郎自身も作句したとは述べているものの「層雲」等の雑誌に発表したとは述べていない。日記や創作ノート等を確認することができていないため制作年代が不明ではあるが、回想のとおり大正期に作句されたものだと思えば、「眠り草が」の句が、昭和一〇年一月、「風流陣」（第二冊）に「ねむり草が実となる日なたがある」と、若干の改作を経て発表されていることが注目される。俳句が詩人村野四郎の重要な基盤として長く継続していたということではあるだろう。

また、およそ五年後の昭和一六（一九四二）年八月、「文芸汎論」（第一巻第八号）に《田園悲歌》と題して五句が発表されている。これらの句についても「風流陣」と同様に「年譜」には全く触れられていない。

第三期の句は、第二期よりも相対的に音数が減り、五・七・五形式の句が多くみられるのが特徴といえるだろう。

以上、本稿の第二章から第四章にかけて発表雑誌を中心に概要を述べてきた。次の第五章に、第一期二三句、第二期一八九句、第三期六四句、計二七六句の全句を「資料編」として年譜形式でまとめた。

のもと「かなしき道標」「松葉杖をついてゆく人よ」「秋愁」「十一月」「吹き暮れる」の詩篇は、同年十一月(第一五巻第七号)発表であり、これも発表月が異なっている。

さて、「層雲」に発表された俳句は、筆者の調査では、現時点で一八九句にもものぼる。また、詩は訳詩も含めて七十四余作品が同誌に発表されている。村野四郎の俳句は、俳句から詩へ移行する時期の彼の文学世界を検討するためには看過できないものであり、その意味からも「層雲」活動期は重要である。

第二期の俳句は、第一期よりも全体的に長めの句が多く、所謂「自由律」を意識したものとなっている。しかしながら「自由律俳句」という形式に収まり切れない表現者としての葛藤もあった時期だとも考えられる。村野四郎自身も、萩原井泉水に師事し、層雲社の句会に参加するうちに次第に「更に自由な形式を思うにいた」つたと回想している。続けて、慶応義塾大学経済学部の学生時代、ドイツ語の教授に秋元蘆風、藤森秀夫がいて、ドイツ詩の魅力を知ったこと、さらに萩原朔太郎の詩との出会いについて次のように述べている。<sup>13)</sup>

これらのドイツの詩の持つ洞穴のように暗く、途方もなく大きな世界に、いままで余り小さい日常的な現象にばかり捉われ、その小さい感情を小形式に託していた私自身は、そこに全く違った文学の世界のあることを知りました。この時期に、更に私に決定的な詩的思考の方向をあたえたのは、萩原朔太郎の処女詩集「月に吠える」と第二詩集「青猫」の出現でした。

二十三、四歳の頃です。これから私の本格的な詩人としての放浪と遍歴がはじまったのでした。

回想で語った時期のとおり、大正一三(一九二四)年一月で「層雲」への俳句発表は終わり、同誌へは大正一四年一月まで詩のみの発表となった。大正一三年頃から、詩の発表の場は「地霊」「詩篇時代」「日本詩人」へと移っていき、さらに大正一五年から昭和に入る「炬火」「詩歌時代」「旗魚」「新即物性文学」「文学」等において詩作に励むようになる。「罨」「体操詩集」所収の作品群の創作は、主としてこの時期にあたる。

詩作品については本稿では特に触れないが、「層雲」での文学的修練が、詩人村野四郎の誕生に深く関わっていることを、ここでは強調して述べておきたい。

#### 四、第三期「風流陣」「文芸汎論」―再び俳句へ

「風流陣」は昭和一〇(一九三五)年一〇月から昭和一九(一九四四)年一月まで六五冊が発行された。創刊号の編集発行人は岩佐東一郎で、第六冊からは八十島稔が担当した。表紙の題字は恩地孝四郎によるもので、その題字の上にはフランス語で「HAIKAI DU JAPON」と記されている。

創刊号には、室生犀星、津村秀松、竹村俊郎、岡崎清一郎、田中冬二、吉川則比古、扇谷義男、亀山勝、八十島稔、川田總七、荘生春樹、岩佐東一郎、北園克衛、城左門の一四名が名を連ねていた。編集後記にあたる「風流陣記」には、「在来の枯渴した俳句に、新生命を吹き込むと云ふ大野心のもとに創刊したもの」で「従来の觀念に捕はれることなく、青空のもとをゆく雲のやうに自由に各位の作品を御提供いただきたい」と書かれている。<sup>14)</sup>

村野四郎は第二冊から参加しているが、「風流陣」については「年譜」にも記載はない。なお、「年譜」の昭和一一(一九三六)年の項



にも掲載され、以後は「層雲」で活動していくこととなった。

### 三、第二期「層雲」—俳句から詩へ

「層雲」は明治四四（一九一一年）年、荻原井泉水が河東碧梧桐らとともに新傾向運動の機関誌として創刊した雑誌である。散文、詩歌、俳論、翻訳等、ジャンルも俳句にこだわらず、初期の「層雲」はドイツ文学を中心にヨーロッパ文学の紹介にも積極的であった。<sup>(8)</sup>

俳句は新傾向派と呼ばれる人々が集まったが、考え方の違いから大正に入って河東碧梧桐が去ると、荻原井泉水を主宰として所謂「自由律俳句」を發展させた。『日本近代文学大事典 第五卷』（講談社、昭和五年一月）の「層雲」の項に次のような記述がある。<sup>(9)</sup>

「層雲」で育った俳句作家たちは野村朱鱗洞、芹田鳳車、小沢武二、秋山秋紅蓼、深田紫洋、下山逸蒼、尾崎放哉、大橋裸木、河本緑石、栗林一石路、木村緑平、青木此君楼、大越吾亦紅、海藤抱壺、藤崎麦村ら。のちに詩人となった村野四郎もいた。

俳句文学史のうえでも、村野四郎の名が紹介されていることが注目される。村野四郎自身も「層雲」への参加について次のように語っている。<sup>(10)</sup> 回想の中には、発表雑誌、発表年月等については事実と異なる点があり注意を要するが、文学的方法や詩想に関しては参考になり得るものもあり、これもその一つである。

（前略）私は新傾向俳句に当時の私の文学的欲求を充すもののあることを幽かに感じてこの結社に加入しました。

そして今までの旧派の定型俳句が、その単調な形式ゆえに、そ

こに盛られる精神も、知らず識らず因襲的、常套的な感懐にならずんでしまうものであること、そしてこの古い形式に抵抗して、新しい精神を盛ることは容易でないことを、今になって新しく知ったと思ひ、この季題も字数の制限も捨てた俳句形式の中に、今まで自分が白秋などの詩に感じていたものに非常に近い純粹なものが盛られるのを感じたのでした。私は「層雲」に没頭しました。

また、俳句もさることながら、詩作の出発も「層雲」からであることも重要である。兄の次郎が北原白秋門下の歌人として活躍していたことも影響し、村野四郎は北原白秋の詩に傾倒していた。大正一〇（一九二一年）年から「層雲」に俳句を発表しつつ、翌年から徐々に詩を発表し始め、大正一四年まで並行して、俳句と詩の発表を続けたのである。筆者の調査では、「層雲」に初めて詩を発表したのは、大正一一年八月（第一二巻第五号）の「追憶」である。七行の短詩で習作の段階のものである。<sup>(11)</sup>

「年譜」には、村野四郎の「層雲」発表の具体的な詩作品については大正一四年の項に次のように述べられている。<sup>(12)</sup>

「層雲」七月号に「冬木がくねつた家を憶えてゐる」の句と「天上の饗餐 外四篇」の詩、同九月号に「洋燈をともしさう」の詩、十月号に「幽鬱小品」の詩を発表。

しかし、大正一四年七月（第一五巻第三号）に発表されたのは、「天上の饗餐」「青桐よ」「おとづれ」「寂しい病室」「春」の詩五篇のみであり、俳句は見当たらず、「冬木が」の句については現段階では確認できていない。さらに、詩「洋燈をともしさう」は、一〇月（第一五巻第六号）発表であり、発表月が異なる。加えて章題《幽鬱小品五篇》

村野哀醒子作は、未成品とも評せられやうがその未成的な新鮮な味を私は採つたのである。未成といふのは「久しい兄弟」といふ言葉が久々で逢つた兄弟といふ意味を現はすには不完全であるし、又、作者は其の兄弟の中の一人であるか、(噴水は自分の主観にあるのか)それとも其外に立つてゐるのか(噴水を客観してゐるのか)その点が判然としないといふ欠点があるからである。然し、其にもかかはらず、兄弟の心がしみじみと触れ合つて、噴水の音も亦、それに触れ合つて、夢のやうに快い或る情景が創り出されてゐる。それは主観とか客観とかいふ差別のないやうな一つの別の世界だとも云へやう、そこを私は未成的なボツとしたまゝの新鮮な味といつたのである。

村野哀醒子の作は(たびたび入賞にはいるが)投稿の中では先づ其の手法が、きはだつて目につくほどになつてゐる。此句の如きも見方のリファインされてゐる点では上手といふに近い、「白い蒲団」は実に印象的で、俳句でなければ云へない味といつてもよからう。

先の「久しい兄弟」の句は、「久しい」という言葉の意味の曖昧さを指摘されているにもかかわらず、「年譜」では、この「久しい」が脱落し「兄弟が寝ついた夜の噴水」と記載されている。発表年月とともに脱字の修正も必要である。また、「病人ゆめの話」の句の「ゆめ」は実際にはひらがな表記である点も修正を要する。以上のことから、村野四郎の俳句に関する「年譜」の記述には修正されるべき点が少なくない。

なお一等に当選したこの句は、同年同月の「層雲」(第一一巻第三号)にも投稿されており萩原井泉水選の「雲堂」に掲載されているこ

とも注目されよう。

「年譜」に記載のない、「層雲」で一等となつた句を紹介しておく。「病人ゆめの話」の句から三か月後、同一〇年九月(第五巻第九号)投稿の次の二句である。萩原井泉水の選評も続けて引用しておく。<sup>6)</sup>

やさしう首ふる草の夕べとなりたり  
母よ鉢木青ううたせをる朝雨安けし

村野哀醒子氏の作(二等)「母よ」の句は、植木鉢などを置いて住む、さゝやかな、つゝましい母と子の生活を背景として、又その鉢木が青く茂つて涼しい朝雨がふる夏の爽やかな感じを色調として、母に対する親しい安らかな心持が浮き出てゐる。「母よ」と叫びかけた言葉も此の気持ちを生かすのに助けてゐる。たゞ「うたせをる」といふ言葉にはまだ推敲の余地があるやうだ、といふのは、少し調子が強すぎる。同じ作者の「やさしう」の句は、上手な句といふべきである、風の甘い囁きが聞かれるやうだ。原句「なりけり」であつたが、此場合「けり」では、情趣的になりすぎる。その草のゆらぎを、自分の心のゆらぎに写す為めには「たり」と引きしめねばならぬ。

第一期の句を概観すると、この二句に代表されるように、主として日常の出来事をモチーフとし、萩原井泉水の説く「作者の内部から溢れ出た」「生命のある新しい俳句」を意識した習作群といえるだろう。<sup>7)</sup>「中央文学」の最後の句は、その二か月後、同年一月(第五巻第一一号)の「夕の葉ひらひら風となり子を看とりをる」で、「秀逸」作品として掲載された。この句は翌月の「層雲」(第一一巻第九号)

法獲得の過程を今後検討するため、これまで明らかにされていないかった俳句を中心に収集し、資料編としてまとめたものである。

村野四郎の俳句は、管見の限り、『定本村野四郎全詩集』（筑摩書房、昭和五年八月）所収の大野純編「村野四郎年譜」（以下、「年譜」）に八句が紹介されているのみである。<sup>(1)</sup>だが、実際には、大正八年から『体操詩集』所収詩の創作時（昭和六年から昭和一〇年頃）を含めた戦前期に、現在分かっているだけで二七〇句以上の俳句を雑誌に発表していたのである。これらの俳句作品は、詩人村野四郎の研究において看過できない文学資料であり、詩論家でもあった彼の詩的方法を分析していくうえでも、重要な基礎資料として意義あるものと思われる。

以下、作品について、まず大きく三期に分け、その概要を述べることにする。今回の調査で収集することができた全二七六句については、発表順に、本稿の第五章に「資料編」としてまとめた。

## 二、第一期「文章倶楽部」「中央文学」——文学的出発

「年譜」に拠れば、村野四郎の父儀右衛門は漢学に詳しく、「寒翠」と号して俳句にも親しんだという。大正二（一九一三）年頃、兄次郎、三郎とともにコンニャク版家庭回覧雑誌「藻塩草」を作り、「四郎は主に俳句を書いた」とある。そのうちの一句「足袋をつぐばあさん日なたほっこかな」が挙げられ、「これが四郎の文学の出発である」と記述されている。<sup>(2)</sup>この「年譜」の、特に戦前の記述については、村野四郎『現代詩読本』（河出書房、昭和二年四月）所収のエッセイ「一人の詩人が歩いた道」に拠るところが多く、本人の記憶がもとになっていることもあって、事実と異なっている箇所が散見される。しかしながら、俳句が、彼の文学的出発であったことは間違いないよ

うである。

俳句の創作と発表は、大正八（一九一九）年に村野哀醒という筆名で「文章倶楽部」から始まり、翌大正九年からは本格的に「中央文学」に投稿するようになった。現時点において、「文章倶楽部」の石橋十堂選の俳句欄に三句、「中央文学」に二〇句の掲載が認められる。「年譜」には、次のような記述がある。<sup>(3)</sup>

定型俳句のマンネリズムを感じだし、文学の世界はもつと自由で荒々しくてもよいのではないかと思うようになり、自由な詩形をもとめて「中央文学」（春陽堂刊）の荻原井泉水選の新傾向俳句欄に投稿した。ところが第一回にして、「病人夢の話をする朝の白い蒲団」が一等に入選、つづいてその翌月「兄弟が寝ついた夜の噴水」が二等に入選。井泉水から、その感覚的な抒情性を激賞された。（引用文中の傍線は筆者による。以下、同じ。）

この記述もまた、「一人の詩人が歩いた道」をふまえたものであるが、「中央文学」に最初に投稿した俳句は後掲の「資料編」でも明らかのように、大正九年九月（第四卷第九号）に掲載された「童べ風にゆる、若苗持ちをり」である。この句は「二等」ではなく、「秀逸」であった。なお、この句は本名の村野四郎で投稿されていた。<sup>(4)</sup>

その後、数句の佳作掲載を経て、翌一〇年四月（第五卷第四号）に筆名「村野哀醒子」で投稿の「久しい兄弟が寝ついた夜の噴水」が二等になり、同年六月（第五卷第六号）投稿の「病人ゆめの話をする朝の白い蒲団」が一等に当選したのである。

荻原井泉水の選評を、「久しい兄弟が寝ついた夜の噴水」「病人ゆめの話をする朝の白い蒲団」の順にあげておく。<sup>(5)</sup>

## 村野四郎初期作品資料

### ―『体操詩集』前後の俳句を中心に―

岩本 晃代\*

#### 要旨

村野四郎は第二詩集『体操詩集』（昭和一四年）によって「モダンズム詩人」として近代詩史上高く評価されてきた。しかし、その評価は限定的であり、彼の詩業のごく一面をとらえたものにすぎない。また、第一詩集『毘』（大正一五年）により詩人として出発する以前から多くの俳句を発表してきたことも、研究上ほとんど知られていない状況にある。村野四郎の詩的出発期には俳句の創作が大きく影響していると推察される。『体操詩集』は、彼の多様な作品群をふまえて新たな視座からの検証が必要な詩集である。

本稿は村野四郎の代表的詩集『体操詩集』を含めた戦前の詩的方法獲得の過程を今後検討するため、「文章倶楽部」「中央文学」「層雲」「風流陣」等の雑誌を中心に調査し、これまで明らかにされていなかった多くの俳句作品を資料編としてまとめたものである。さらに、本資料をもとに『定本村野四郎全詩集』の「村野四郎年譜」の記述についても一部修正等を実施した。

#### キーワード

村野四郎 俳句 『体操詩集』 荻原井泉水 「文章倶楽部」

「層雲」「中央文学」「風流陣」

#### 一、はじめに

これまで、村野四郎は『体操詩集』（アオイ書房、昭和一四年一月）により「モダンズム詩人」として、近代詩史上、高い評価を受けてきた。確かに『体操詩集』はドイツの新即物主義を基調としており、西欧のモダンズム思潮の影響を受けた斬新な詩集であった。しかし、それは極めて限定的な評価であり、村野四郎は「モダンズム詩人」と一言では片付けることのできない詩人である。第一詩集『毘』（曙光詩社、大正一五年一〇月）以前に創作した作品、『毘』から『体操詩集』刊行までのおよそ一五年間の創作過程については、詳しい調査研究がなされておらず、『体操詩集』のみが切り取られて部分的に評価されてしまっているのである。『体操詩集』は、当時の多様な作品群をふまえて新たな視座からの検証が必要な詩集である。

本稿は、村野四郎の代表的詩集『体操詩集』を含めた戦前の詩的方

\* 崇城大学総合教育センター教授